

援助的サマースクールの研究IX (その10)

A Study on Supportive Summer School IX (10)

小野坂 益成

(東京成徳大学大学院)

石崎 一記

(東京成徳大学)

Masunari ONOSAKA (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

Kazuki ISHIZAKI (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究では、第1回から第8回援助的サマースクールにおける看護者であるN.Sに、援助的サマースクールにおいて、どのような役割を求められているか・行っていたかについて考察された。援助的サマースクールの看護者の役割は健康管理のみではなく、スタッフを育てる役割や、身体的ケアのみでなく、精神的な部分に目を向け、ケアをすることで子ども達が安心していられる居場所をつくることも役割の一つであると示めされた。

キーワード：サマースクール、健康管理、居場所、看護者

I. はじめに

今回のサマースクールは第9回目となり、前年度までの看護者はスーパーバイザーとして参加した。今年度から新しい看護者になった。新しい看護者は前年度までスタッフとして参加していたが、今回看護者として健康管理を行ってみて、援助的サマースクールは健康管理のみではなく、別の視点を持って、子ども達・スタッフに関わっているように感じた。

そこで、今回の本研究において、前年度までの看護者にインタビューを行い、そこで語られた「語り」から、前看護者であるK・Nがサマースクールにおいて、今までどのような経験をしたのか、それにより、この構成的サマースクールにおいて求められていると感じる看護者の役割をどのように考えているのか、ということを検討する。

II. 方 法

1. 対 象

名 前：K.N

性 別：女性

年 齢：37歳

役 割：スーパーバイザー

(本学修了生、1回～8回の看護師)

2. 日時・場所

日 時：10月16日 16:00～17:00

場 所：本学、面接室211

3. 倫理的配慮

研究依頼時には、倫理的配慮の側面として、本研究で得た情報は本研究以外の目的で使用することは一切ないこと、研究協力は任意であることを

説明した上、了解を得て面接およびインタビューを行った。

4. 手続き

半構造化面接により試行し、リサーチクエスチョンは下記の8点である。

- ① サマースクールに最初に参加した、きっかけ。
- ② 動機は、どのようなことか。
- ③ 動機は、変化していききましたか。
- ④ サマースクールでは、どんなことをしてきたか。自分の役割は、どのようなことか。
- ⑤ 子ども達に対して、どのような気持ちを感じているか。
- ⑥ スタッフに対して、どのような気持ちを感じているか。
- ⑦ 今までのサマースクールに参加して、得られたものは何なのか。
- ⑧ あなたにとってサマースクールは、どのようなものなのか。

5. 分析方法

本研究では、研究協力者が看護者として援助的サマースクールの経験を明らかにしようとするものである。そのために本研究では、“私たちがすでに黙示的には理解しているようなもろもろの物事を、露わにして、明示的な理解をすることを目標としている（清水，2004）”ことから、解釈学的現象学的分析（以後 IPA）の方法を採用することにした。

具体的な分析プロセスは以下のものである。

(1) 分析プロセス1

研究協力者のインタビュー記録を何度も読み返して、全体の意味が把握された。本質的かつ自然な意味のまとまりの単位を「場面」とし、インタビュー記録を「場面」で区切った。その後、「場面」の記述の中で、本研究と直接関係の無い記述

を除き、残った本研究の分析対象となる各場面の意味を、対象者が用いている具体的な言葉で分析可能な記述に整えて、それを「テーマ」とした。この「テーマ」は再度読み込まれ、「テーマの中心的意味」が導き出された。この作業は「テーマ」の抽象化のプロセスであり、研究協力者の言葉を元に研究者が表現を加えた。

(2) 分析プロセス2

分析プロセスによって導き出された「テーマの中心的意味」を更に抽象化して論述するために、「テーマの中心的意味」の関連を考慮し、本質的で意味が重複しない意味を統合した。この段階においては、個々の面接過程の具体性と固有性を含むレベルでの記述である。これを「状況的構造的記述」として< >の内に記述した。

ここで、「状況的構造的記述」は、内在化された時系列である記憶の順序ではなく、「いつの頃を思い出しているか」の実際の状況に沿った時系列で分類した。

(3) 分析プロセス3

解釈学的現象学的分析は個人のケースの分析を行うことが出来る。しかし、研究協力者が一人のため、複数人の状況的構造的記述から一般的構造的記述への統合というプロセスができない。そのため、分析プロセス2を経て得られた一人のインタビューデータ「状況的構造的記述」のみを抽象化した。そして、最終的に導き出された分析結果を「一般的構造的記述」と呼んだ。

以上に記したように、分析プロセス1から分析プロセス3までを経て明らかになった。

「状況的構造的記述」と「一般的構造的記述」が本研究の結果として扱われた。

Ⅲ. 結果

第9回援助的サマースクールにおいて、K.N

は、スーパーバイザーとして参加した。K.N は第1回から第8回まで看護者として参加しており、そこでの経験や思いなどが語られた。

インタビューは約1時間に渡り行われ、そのデータを元に分析を行った。

分析プロセス1において、インタビューデータは「場面」に分類され、92の「場面のテーマ」と「テーマの中心的意味」が特定された。分析プロセス1で得られた結果を Table 1 に示す。

分析プロセス2において、31の「状況的構造的記述」が本人の内的・外的経験に沿った時系列に導き出された。分析プロセス2で得られた結果の概要を Table 2 に示す。

また、分析プロセス3において、6つの「一般的構造的記述」が抽出された。「一般的構造的記述」は Table 3 に示す。

IV. 考 察

研究協力者 K.N のインタビューデータを分析した結果、多様な状況的構造的記述が抽出された。援助的サマースクールにおいて、K.N が経験したこと、感じたこと、考えたことは多様であった。

ここでは、本研究の目的である、前看護者が今までのどのような経験をしたのか、それにより、この援助的サマースクールにおいて求められていると感じる看護者の役割をどのように考えているのか、を考える。

- 1) 「前看護者が今までどのような経験をしたのか」
- 2) 「この構造的サマースクールにおいて求められていると感じる看護者の役割をどのように考えているのか」

以上のことを、「一般的構造的記述」を踏まえて、考察した。

- 1) 前看護者が今までのどのような経験をしたのか
前看護者である N.S の「動機」は、最初「漠

然としたイメージしかなかったが、頼まれたので参加した」であった。しかし、援助的サマースクールの回数を積むにつれて、「子供たち・学生たちの成長を見たいという動機への変化」と変わってきた。それは、前看護者である N.S の援助的サマースクールにおける「経験」により、変化したのだと考えられる。

行動理論では、行動の「動機」は主要な研究テーマの一つである。そして、“Deci は、行動の動機を内発的動機と外発的動機に分類する内発的動機理論を提案している。内発的動機とは、何かに対する興味を満足させるため、もしくは達成感を得るために自己目的的に行動をしている状態の動機であり、外発的動機とは外的要因によって動機づけられている行動をさす (1975 長沼訳, 2004)”。また、Deci (1975)、Deci and Ryan (1980) によれば、内発的動機付けは、自己決定感と自己有能感への要求に基づくものであり、自己決定感の方がより基本的な構成要素であるとされる。内発的動機理論によれば、報酬には情動的側面と制御的側面がある。もし、情動的側面がうまく、自己有能感が高められれば、内発的動機付けは高くなる。制御的側面が強いと、自己の行動の認知された原因が自己の内部から外部への移行してしまう。つまり、自己は報酬によって制御され、報酬のために行動しているという認知が生ずる。その結果、自己決定感が失われ、内発的動機付けは低下する。そして、内発的動機付けと報酬との関係に関する研究の大半は報酬によって内発的動機付けが低下することに注目してきた。(アンダーマイニング効果)

しかし、外的報酬がすべてアンダーマイニング効果を示すわけではない。言語報酬などの外的要因が逆に内発的動機づけを高める場合のあることも同時に指摘されるようになり、この現象はエンハンシング効果と呼ばれた (鹿毛, 1995)。

そのなかで、Deci & Ryan は、内発的動機づけの理論を発展させ自己決定理論を報告しており、

現在では動機づけ現象全般にかかわる理論として発展している。そこでは、生理的欲求と心理的欲求とを区別した上で、①有能さへの欲求（環境と効果的にかかわりながら学んでいこうとする傾向性）②関係性への欲求（他者やコミュニティとかかわろうとする傾向性）③自律性への欲求（行為を自ら起こそうとする傾向性）の3つをいずれも人が生得的にもっている心理的欲求として特定している（2002 鹿毛訳, 2004）。

前看護師である N.S のインタビューデータの一般的構造的記述【経験】である、「子供たちの成長を継続的に見える」「子ども達と関わりは、多くのことを経験する」「自己受容で人に素直になれる」「相手への姿勢は被害的・肯定的にも影響」「不安は、意見を素直に聞くことに影響」「相手を認めると、関係が築ける」「素直になると人の意見に気づく」「母親が感じるものに近づける」「子ども達との関わりで、多くを学ぶ」「素直になれ失敗を許せる」という、状況的構造的記述があるが、これらは上記の、①有能さへの欲求（環境と効果的にかかわりながら学んでいこうとする傾向性）②関係性への欲求（他者やコミュニティとかかわろうとする傾向性）③自律性への欲求（行為を自ら起こそうとする傾向性）の3つに該当すると考えられる。

これらの経験により、援助的サマースクールの経験から、参加するという動機が、外発的動機付けから内発的動機付けに変化したのではないかと考えられる。また、②関係性への欲求（他者やコミュニティとかかわろうとする傾向性）は一般的構造的記述である【子ども達への想い】【スタッフへの想い】にも関わっており、子ども達・スタッフへの想いも、他者に関わろうとする傾向性であると考えられる。そして、その結果、「子供たち・学生たちの成長を見たいという動機への変化」という動機に変化したのではないかと考えられる。

2) この援助的サマースクールにおいて求められていると感じる看護師の役割をどのように考えているのか。

日本において看護師とは、保健師助産師看護師法（略称「保助看法」第5条）の定めるところによると、「厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者若しくはじょく婦（褥婦＝出産後の女性）に対する療養上の世話、又は診療の補助を行うことを業とする者」と定められている。また、一般的な役割として、看護とは、人間が本来持っている自然の治癒能力を最大限に発揮しやすいような環境を作り出し、病気を持つ人の健康の回復、及び、今現在健康な人に対しても、疾病の予防や健康の増進のために支援をしていく活動であり、看護師は、その看護を専門的な知識、技術に基づいて実践していく専門職である。

N.S は、この援助的サマースクールに参加する前に看護師としてキャンプのアルバイトを経験していた。そして、この看護師のアルバイトの業務は往々にして健康管理の面が強い。それは、キャンプのアルバイトは、救護バイトというカテゴリーになっており、団体及び個人のイベント先で、参加者の健康管理、発病時の対処・救護などの看護師の業務といい、イベントのほかセレモニーやパーティー参加者の健康管理、発病した方の正確な心身の状況を把握し、可能な範囲での緊急医療サポート等をしてさらに病院への搬送の場合は本人及び主催者に促すことが主な業務内容である。そして、救護バイトの看護師は、医療設備がある病院業務などとは違い、看護師の基礎的な医療知識はもちろんのこと、緊急対処、判断力、応用力といったスキルも重要とされ、また、看護職の中でもサービス職としてのサービスマンシップそしてコミュニケーションスキルも必要な救護バイトといいアルバイトの募集がされることがある。

上記のため、最初の援助的サマースクールは健康管理の業務面を行っていけばよいと考えていたのではないかと考えられる。しかし、援助的サマー

スクールに参加し動機が変化したことにより、一般的構造的記述である【子ども達への想い】【スタッフへの想い】【サマースクールへの想い】で抽出されたように、健康管理意外への係わりが強くなってきたのではないだろうか。

一般的構造的記述である【役割】の状況的構造的記述では「看護師の健康管理という役割の不安や重圧」「子ども達は看護師としてみる」「子ども達の健康管理や身体的・精神的なケア」「経験者として、スタッフを見守り支える」と抽出されている。もちろん健康管理も看護師の仕事の一つであると考えられる。しかし、その人を看るとは、健康管理のみならず身体的・精神的なケアも含まれ、また見守り支えることも役割であると考えていたのではないかと考えられる。

V. まとめ

N.Sは、考察1)で述べているように、一般的構造的記述で抽出されたような【経験】を体験するにつれ、【動機】が「子供たち・学生たちの成長を見たいという動機への変化」と変化し、また、2)で【子供たちへの想い】【スタッフへの想い】【サマースクールへの想い】を経験するにつれ、N.Sが考える看護師の【役割】は、健康管理のみではなくスタッフを育てる役割や、身体的ケアのみでなく、精神的な部分に目を向け、ケアをすることで子ども達が安心していられる居場所をつくることも役割の一つであると考えようとなったと考えられる。

VI. 終わりに

今後の課題として、今回は一人のみのインタビューとなり、状況的構造的記述から複数人からなる共通性を見ることができなかった。ただ、援助的サマースクールにおいて、看護師は一人のため、回数が増え看護師としての経験者のインタビューが

増えていくのではないかと考える。

前看護師である研究協力者のN.Sの協力をいただき、今回の研究をすることができました。貴重な時間を頂いたことを感謝したい。また、9回目の援助的サマースクールから、まっすーが看護師として参加しましたが戸惑うことが多く、N.Sのインタビューから学ぶことが多かった。

引用・参考文献

- 鹿毛雅治 1995 特徴的な達成現象とその理解宮本美沙子・奈須正裕(編) 達成動機の理論と展開続・達成動機の心理学 金子書房
- 鹿毛雅治 1996 内発的動機づけと教育評価 風間書房
- 鹿毛雅治 2004 「動機づけ研究」へのいざない上淵寿(編) 動機づけ研究の最前線 北大路書房
- 清水健史 2004 がん患者の家族に対する心理的援助 淑徳大学大学院研究紀要 11, 105-123
- Deci, E. L. 1975 Intrinsic motivation. Plenum Press, (安藤延男・石田梅男 訳 内発的動機づけ：実験社会心理学的アプローチ 誠心書房 1980)
- 広瀬寛子 1992a 現象学的アプローチによる体験世界の記述 人間精神心理学研究 10(2), 82-94.
- 広瀬寛子 1992b 看護面接の機能に関する研究 透析患者との面接過程の現象学的分析(その1) 看護研究 25(4), 364-384.
- 広瀬寛子 1992c 看護面接の機能に関する研究 透析患者との面接過程の現象学的分析(その2) 看護研究 25(6), 541-566.
- 広瀬寛子 1992d 看護面接の機能に関する研究 透析患者との面接過程の現象学的分析(その3) 看護研究 26(1), 46-66.
- 梶原隆之 2007 統合キャンプにおける ボランティアリーダーへの支援 文京学院大学人間学部研究紀要 9(1), 37-49.
- 木戸 脩 編 2006 関係法規 第四版 メヂカルフレンド
- 長沼君主 2004 自律性と関係性からみた内発的動機づけ研究上淵寿(編) 動機づけ研究の最前線 北大路書房

Willing, Carla. 2001 INTRODUCING
QUALITATIVE RESEARCH IN PSYCHOLOGY
Adventures in theory and method Open
University Press Buckingham (上淵寿・大家まゆ
み・小松孝至 共訳 2003) 心理学のための質的研
究法入門—創造的な探求に向けて— 培風館 pp.
70-95.

Table 1 分析プロセス1の概要

場面番号	テーマの中心的意味
1	【1回目は、お願いされたので、看護師として参加した】
2	【初回、サマースクールについて、漠然としたイメージであった。】
3	【2回目は楽しいと大変の半々であり、参加をお願いされ、また参加してもよいと考えていた】
4	【2回目以降はサマースクールは大変だけど、楽しいので参加したい】
5	【2年目は、日にちが空いていた。】
6	【サマースクールは回を重ねる毎に、落ち着いていった】
⋮	⋮
86	【サマースクールはお気に入りの居場所である】
87	【成し遂げようというのではなく、自然体でいられる】
88	【集団生活は苦手である】
89	【大きい集団はとくいではないが、楽しいので参加している】
90	【健康管理の不安はいつも付きまわっている】
91	【親御さんとの十分な情報の共有する必要がある】
92	【先生との十分な情報の共有やシェアする必要がある】

Table 2 状況的構造的記述の概要

状況番号	場面番号	テーマの中心的意味	状況的構造的記述
1	1	【1回目は、お願いされたので、看護師として参加した】	<漠然としたイメージしかなかったが、頼まれたので参加した>
	2	【初回、サマースクールについて、漠然としたイメージであった。】	
	88	【集団生活は苦手である】	
2	3	【2回目は楽しいと大変の半々であり、参加を願われ、また参加してもよいと考えていた】	<楽しかった経験が参加の後押しとなった>
	5	【2年目は、日にちが空いていた。】	
3	4	【2回目以降はサマースクールは大変だけど、楽しいので参加したい】	<サマースクールは大変だけど楽しい>
⋮	⋮	⋮	⋮
30	85	【自分の再確認として、リセットという意味でも参加している】	<自分の再確認と、原点へのリセット>
	89	【大きい集団はとくいではないが、楽しいので参加している】	
31	10	【サマースクールは、自分の居場所である】	<自分にとっての心の居場所・人との繋がりが>
	15	【気持ちという部分での居場所という部分が大きい】	
	78	【サマースクールで得られたことは、自分の居場所・人の繋がりにある】	
	86	【サマースクールはお気に入りの居場所である】	

Table 3 一般的構造的記述の概要

番号	一般的構造的記述	状況番号	状況的構造的記述
1	動機	1	<漠然としたイメージしかなかったが、頼まれたので参加した>
		2	<楽しかった経験が参加の後押しとなった>
		6	<子供たち・学生たちの成長を見たいという動機への変化>
2	役割	7	<看護師の健康管理という役割の不安や重圧>
		8	<子供たちは看護師として見る>
		10	<子ども達の健康管理や身体的・精神的なケア>
		16	<経験者として、スタッフを見守り支える>
3	経験	5	<子供たちの成長を継続的に見える>
		15	<子ども達と関わりは、多くのことを経験する>
		20	<自己受容で人に素直になれる>
		21	<相手への姿勢は被害的・肯定的にも影響>
		22	<不安は、意見を素直に聞くことに影響>
		23	<相手を認めると、関係が築ける>
		24	<素直になると人の意見に気づく>
		25	<母親が感じるものに近づける>
		28	<子ども達との関わりで、多くを学ぶ>
		29	<素直になれ失敗を許せる>
4	子ども達への想い	4	<子供が好き・可愛い・楽しい>
		9	<サマースクールは子ども達が安心していられる居場所>
5	スタッフへの想い	11	<子どもとバディの相互の関係>
		13	<スタッフの成長を信じている>
		14	<いろいろな人との関わりを、楽しんでほしい>
		18	<一体感・達成感がなく大変さのみであると、次回来ない>
		19	<援助の楽しさ・経験を実感して次につなげたい>
		26	<自分の引き出しが広がる>
6	サマースクールへの想い	3	<サマースクールは大変だけど楽しい>
		12	<自分が自然体で居られる場所>
		17	<リピーターが増えることにより、クォリティーが上がる>
		27	<成長を親御さんと共有>
		30	<自分の再確認と、原点へのリセット>
		31	<自分にとっての心の居場所・人との繋がり>